
負の惨劇

kai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

負の惨劇

【Nコード】

N7269Z

【作者名】

k a i

【あらすじ】

ある日、ここ箱庭学園に転校して来た黒田暗示^{くろただあんじ}。暗示は理事長に呼び出されてある依頼をされる・・・

ハジマリ(前書き)

皆さんおはようございます、こんにちは、こんばんは。どうもk a
iです。興味本位で書いてみました。少し短いですがご了承くださ
い

ハジマリ

主人公になれるのかどうか分からない人

黒田暗示くろだあんじ

今までの人生で人と話した事がないくらいーいやつ

暗示 side

ようし・・・どう自分を紹介するのか分からないんでここは少年漫画みたいな感じで紹介するか

よつ、オレの名前は黒田暗示だ。ひよんな事からここ箱庭学園に入学することになった。

それにしてもよく入れたな〜オレは学力全然ないのに受かったからな〜まあいいやオレは今度こそ友達を作るぞ！！

とまあこんな感じかな？自己紹介も終わったし、じゃあ行くかちなみにオレのクラスは1年マイナス13組だ。

オレは、まず理事長さんにアイサツしに行ったなぜ学園長の所に行くかって？

それはね、オレにも分らないさまあ、とりあえず部屋の前に来た

オレは、周りに誰もいないことを確認するとドアをノックし

「失礼します」

そう言っ中に入ってみると

不知火袴しじぬいはかまと安心院あんしんいんさんがいた

え？何で知ってるかって？

それはね、オレのスキル パラレルズノウ 異世界知というのがあってね

オレは、別の世界に行くことができて知らない人の情報をデータとして脳に記憶してるんだよ

「そこに座ってください」

オレは、イスに座って笑顔で言った

「何だよ老人二人がオレに用って」

「おいおい老人とは言ってくれね〜」

安心院さんがうすら笑いを浮かべて言った
いつ見ても何考えてるのか分からない人だ
その時、袴がオレにこう言った

「君を呼んだのは他にもありません・・・黒神めだかを生徒会長の座から引きずり下ろして欲しいのです」

企画

何考えているんだ、このジジイは

「つまりオレを、悪役にしたい訳か・・・」

「そういうことです」

「え〜オレ絶対負けますよ」

「何言ってるんだよ、君の異世界知パラレルズノウがあれば相手の弱点なんて簡単に分かるだろ」

「いや〜このスキルは、情報を手に入れる力で戦闘向きじゃないんですよ」

「大丈夫、君は他にもスキルを所持しているということは知ってるから」

「な・・・何の事ですか〜?」

「しらばっくれるなよ、君のことは理事長から全て聞いてる」
隠しても無駄みたいだな

「はいはい、分かりました」

「では、教室に戻ってください」

オレは、笑顔でこう言った

「はい、あっ、それと部屋に生徒入れるのやめてくれませんか？ さっきからうっとうしくて仕方なかつたんです」

オレは、そう言つと部屋から出ていった

袴 side

あの少年・・・気づいていましたか・・・
まあこれは、予想の範囲内のことです
もしも、これが分からないのであれば、彼はめだかさんに本当に勝
てないでしょう

「不知火君、本当に彼でいいんだね？」

「はい、彼ならやり遂げられるでしょう」

「毎度思うんだが、その自信はどこから湧いてくるんだね？」

「それは、年寄りの感です」

「そうか」

安心院さんは微笑みを浮かべながらおっしゃいました

暗示 side

オレは今、どこにいると思う？

そう！オレは今、教室の前にいる

とうとうこの時が来たぜ

ヤ・・・ヤバいよこれ、緊張してきた！

なぐんてね、そんなお約束なパターンはもうとっくの昔にやっている
オレは、勢いよくドアを開け

「おはよう皆さん、転校して来た黒田暗示だよ、よろしくね！！」

その瞬間、釘バットがオレの頭上から振り下ろされた

オレは、一歩後ろに戻り、避けた

「おいおい、健全な高校生に危ない物向けるなよ」

「なっなぜ避けられた？」

「オレは、前に一度、お前の釘バットで殴られてるから知ってるんだよ」

「何言ってるんだ？お前とは、初対面のはずだが・・・」

「オレの、パラレルズノウ異世界知で別の世界でお前と会ってるんだよ」

「くっ！」

ここは、おもしろいそうなヤツらがいっぱいだな
ここでなら、いっぱい友達が出来るぞ〜

トモダチ

「イェーイ!!」

え？なんでそんなにテンション高いかって？

それはね、オレに新しい友達が出来そうだから

しかも、さっきオレを撲殺しようとした彼だぜ!!

何で仲良くなつたかって？

回想シーン入りまーす

「お前俺のこと前に会つたつて言つたよな？」

「ああ、そうだけど」

「だったら俺のスキルも分かるよな？」

「そうだね」

「行くぜ、アタッキングフォース攻撃軍!!!」

そう言うつと釘バット君はすごい速さでオレを殴ってきた

「イタタツ」

「どつだ！これが俺のスキルアタッキングフォース攻撃軍だ!!!」

「ああ、何度もくらつてるよ。確か・・・自分の攻撃を瞬間的に速くする・・・だっけ？」

オレは、にこやかに言った

「な・・・何で笑っていられる」

「そのスキルはもう攻略済みだよ」

「ち・・・ちくしょう」

「なあ、何でオレを襲ったんだ？何もしてないのに」

「ああ？簡単だよ、転校生が来るって聞いたからつさばらしに一回殺しておこうと思ったからだよ」

動機・・・不純だな！！

まあいいや、とにかくオレの友達になってもらおう

「なあなあ、オレの友達にならない？」

「え？」

「オレ、友達1人もいないから」

「何で、友達がいらないんだよ」

オレは、友達がない理由を全て教えた
全て話し終えて釘バット君の顔を見ると鼻水たらしながら泣いていた

オレは、動揺した

おいおい！これは、パラレルズノウ異世界知では体験してないぞ！！
あの勇ましい顔はどこにいったんだ！！

「俺は、その話を聞いて感動したぞ！」

「お・・・おお！ありがとう」

「分かった、友達になってやる」

「え、なってくれるの!?!」

「ああ、同じマイナス同士仲良くしようぜ」

「やったー！！！」

と言う感じで今にいたるわけだよ

「ところでお前の名前は？」

「俺の名前は不正ふせい怜れい次じだ、お前は？」

「オレの名前は黒田暗示だ」

「ところで暗示、お前の好きなマンガ雑誌はなんだ？」

「もちろん男は黙って週刊少年ジャンプだろ」

「そうかそうか！！お前もジャンプ派か！！」

とまあ、オレの一日は終了していった

安心院 side

僕は今、廊下の天井を歩いている

そして、僕は色々と考え事をしていた

あの暗示という生徒が気になっていた

うーんこれは恋の悩みかな？

なうんてねあんな若造に恋愛なんてするわけがない

それに恋愛なんて、そんなくだらねえーカスみたいな感情とっの昔

に捨ててやった

さてと、しばらく様子を見させてもらおうよ

・・・黒田暗示君

宣戦布告

ふあゝあ

おはよう、みなさん!!

今、オレは自分の家にいる

全くいやゝな天気だぜ(ちなみに今、晴れである)

え?普通いい天気だろだつて?

そうかな?オレにとっては嫌な天気だけどな

まあ、とりあえず学校の準備をするか

ゝ10分後ゝ

よし!準備完了!!

では、学校にレッツゴー!!

オレは、何気なくいつもと同じ道を歩いていた

その時、曲がり角で誰かとぶつかった

おっ!これはラブコメで定番のパターンでは・・・ということとは女の子?

そこにいたのは・・・

善吉だったーーーー!!

「おっ!悪い!!怪我はないか?」

うん・・・別の意味で怪我をしたよ

「大丈夫だよ」

「そうか、良かった」

「じゃあ、オレは行くから」

「あつ、ちよつと待て！」

「何だよ」

「お前名前は？」

「黒田暗示だ」

「俺の名前は、ひとよしぜんきち人吉善吉だ」

知ってるよ

「ぶつかって悪かったな、今度、何かおごらせてくれよ」

「いや・・・別にそんなつもりじゃ・・・」

「まあ、そう言うなよ、じゃあな！..!」

善吉はそう言うと、どっかに行ってしまった

「あつちは、学校とは真反対の道だぞ」

オレは、そう呟くと鼻歌を歌いながら学校に行った
学校に着くと今日のことを怜次に話した

「まじかよ、生徒会の奴と会ったのか！」

「ああ」

「俺は、あいつらが嫌いだ！」

「何で？」

「俺達の球磨川先輩くまがわを生徒会に引き入れたからだよ！！」

「ああ、そういうことね」

そういえば、黒神めだかにアイサツをするのを忘れてたせっかく転校して来たんだからな
じゃあ、行くか！

「悪いな怜次、急用ができた」

「何だよ急用って」

「ちょっと、アイサツ周りに行く」

「おう、分かった」

善吉 side

俺は、いつもと変わらず庶務の仕事をこなしながら、平穏な毎日を送っている

しかし、なぜか今日だけはいつもと違う感じがする

めだかちゃんにいたっては、いつもと変わらず生徒会長の仕事をしている

阿久根先輩と喜界島きかいしまも変わらず仕事をしていた
球磨川も、いつもの通りニヤニヤ笑いながらジャンプを読んでいた
気のせいかと思って仕事に戻ろうとしたとき

「おっはよーございます!!」

いきなりデカイ声が聞こえてきた
何だ!?!と思い声のする方を見た
そこには、黒田がいた

「え、黒田? 何でお前がここに?」

「ヤッホー、善吉君久しぶりだね」

「いや、朝会ったばかりか」

「何だ善吉、知り合いか?」

「あ……うん、朝忘れ物して走って取りに戻ろうとしたときぶつ
かった時に会ったんだよ」

「ていうかお前、ここの生徒なのか!?!」

「そっだよ、ちなみに学年は一年マイナス十三組だよ」

「「「!?!」」」

『やったーぼくに、新しい後輩ができたー!?!』

「そうですね、球磨川先輩」

『あれ？なんでぼくの名前を知ってるの？』

「それは、秘密です」

「ところで何でお前がここにいるんだ？」

「ん？ああ、それはね、黒神めだかを生徒会長の座から引きずり落とすためだよ」

「「「!？」」」

「あ！口がすべった」

「大丈夫だよ、今日はアイサツだけだし」

何だこいつ？言ってる事が球磨川並だぞ！！
その時、めだかちゃんが

「おもしろい！！いつでも勝負を受けてやる！！」

「ありがとう！じゃ、オレは教室に戻るんで」

「おお！待っているぞー！！」

黒田は、みんなに一礼して帰って行った

暗示 side

ふゝ緊張したゝ

「いやゝ良かったよ暗示君！！」

天井から安心院さんがぶら下がっていきなり言ってきた

「安心院さん……」

「ぼくは、君を見直したよ。生徒会全員に大胆発言！」

「いや……あれは、口がすべっただけですよ」

「そうかい？でも良かったよ、球磨川君以来の発言だよ」

「そうですか？」

「そつだよー！」

「ありがとうございます」

「ところで暗示君」

「はい」

「一つ聞きたいことがあるんだが」

「なんでしょっつっ」

「君・・・本当にマイナス？」

宣戦布告（後書き）

かなりがんばりました!!

お話

「え、今なんて？」

「君は本当にマイナスなのかい？」

「それって一体どういづことですか？」

「僕は、ずーと君を見ていた、そして、気づいた」

「何に？」

「君の過不荷だよ」

「え？」

「普通マイナスな生徒は、いつも勝つことに憧れている」

「しかし、オレの場合は勝つことに憧れがない、でしょっ？」

「そう！君の過負荷、パラレルズノウ異世界知がいい証拠だ」

「・・・」

「あのスキルは、どう見てもアブノーマル向きだ」

「・・・」

「そして、聞くが、何で君はこの学校に来たんだい？」

「うーん、親の都合ですかね」

「本当にそうかい？」

「そうですよ」

安心院さんは、光のない目でオレを見てきた
まるでオレの心を見透かしているようだった
そして、安心院さんはこう言った

「まっいいや！」

「今の話を聞いてみると君は、マイナスじゃないということが判断できたよ」

「！」

「じゃあ、僕は帰るね」

「ちょっと待ってくれ！！」

「何だよ、僕は、速く帰ってジャンプを読まなきゃいけないんだぜ」

「聞かなきゃいけないことがある」

「何だい？言ってみな」

「オレは、何者なんだ？」

「うーん、言われてみればそうだったね」

「でも、そういうことは自分で分かるうと努力するんだよ」

「じゃあ、がんばってね」

安心院さんはどっかの青春マンガみたいな台詞を吐いた
安心院さんの答えがあまりにも期待はずれだった
その時、安心院さんが

「ああ、そうそう知ってるかい？」

「何ですか？」

「・・・新しいクラスが作られるらしいぜ・・・」

「えーマイナスの次にどんなクラスができるんですか？」

「おっと！ここから先は言えないぜ」

なら話すなよ！！
オレは、心から思った

「何でですか？」

「ここで話したらおもしろくないだろ」

「そんな〜」

「まっ、がんばって」

そう言つと安心院さんは、去っていった

「まあそんなに自分を責めるなよ」

オレは、びっくりして後ろを見た

そこには、みかけない制服を着た女子がいた

黒い髪でロングヘアの子だった

こいつは、誰だ！

パラレルズノウ
異世界知でこんな奴いなかったぞ！

「まあ、そりゃあそうでしょ、だって私は、この世界にしかないんだから」

「!?!」

なっ！

こいつオレの心を……！

「うん、私は心が読めるの！これが私のスキル……心読み（メンタルリード）」

「お前……何者だ！」

「そんなに身構えるなよ……私の名前は綺羅瀬真意きらかせまことあなたの兄妹」

「!?!」

「なんてね、簡単に言つとあなたと同じかな」

「同じ……だと！」

「そう、私は自分が何者かが分からない」

「こいつも・・・」

「ところで綺羅瀬お前は、なんでここにいる？」

「それはね、転校して来たはいいんだけど場所が分からなくてね」

「お前、ここじゃないのか？」

「うん」

「どこの組だよ」

「えーとね・・・・・・・・・・・・・・・・ポースマイナス十三組！」

「なっ！」

「そんな組ねえぞ!!」

「何言ってるんだ!？」

「あるよポースマイナス十三組」

「確かあなたもポースマイナス十三組のはずだよ」

「な・・・何言ってるんだよ!オレは、確かにマイナス十三組のはずだ!」

「それは、新しいクラスが出来るまでの間じゃないのかな？」

もしかして、安心院さんが言った新しいクラスって・・・

「そう、ポースマイナス十三組なのだよ！」

自分（後書き）

ポースの意味が分からない人のために説明します
ポースというのは、日本語で言うところに見かけという意味です
意味の分からない英語を使ってしまうてすみません

ポースマイナス十三組

まじかよ・・・

「そうそう、まじもまじ、大まじさ！」

「・・・」

「どうした？不安そうな顔だね」

「いきなりそんなクラスに入ることになったから少し驚いてるんだよ」

「ふん」

「そういえば、あなたの名前を聞くの忘れてた！」

「オレの名前は、黒田暗示だ」

「へーよろしくね・・・本当は名前知ってるんだけど」

「なら聞くなよ！」

オレは、笑っていた

そして、綺羅瀬も笑う

いつの間にか、心の中のもやもやが消えていた

「でっ、いつからオレはポースマイナス十三組に移るんだ？」

「うん、明日かな？」

「適当だな」

「まあいいじゃん！じゃあ、私は、帰るね」

「え？もう帰るのか！？」

「うん、今日はただ下見に来ただけだから」

「そうか、じゃあな！」

「うん、じゃあね」

綺羅瀬は、黒い髪をなびかせて去って行った

その後、怜次が来た

「なあ黒田、さつきすごい美人な奴見かけたぞ！」

「そうか、なあ怜次」

「さつきは、冷たい態度とって悪かったな」

「ん？ああ！あの時か、別に気にしてないぜ」

「そうか、良かった」

「なあ、黒田ラーメン食いに行こうぜ！」

「ああ！いいぜ！！！」

こうして、オレの一日が終わった

翌日、目が覚めた

なんか体に妙な違和感があるな
布団をめくってみると

そこには、裸の綺羅瀬だ————！！！！！！

「な……何でお前がここに！？」

「うーん……あつ、おはよう」

「おはようじゃねえー！！とりあえず服を着ろ！！服を！！！」

とりあえず綺羅瀬に服を着させたオレは、なぜここにいるか聞いた

「もう一度聞くんが、何でオレの家にな？」

「いや、私、天涯孤独だからさ、寂しいから黒田の家にお邪魔した
訳よ」

「え？どうやってオレの家を知った？」

「えーとね、黒田君をずーとストーキングしてたんだ」

へ……変態か、てめえは！！！！

「変態じゃないよ〜！」

「まずい！かなりまずい！！」

「こんな所を親に見られたらどう思われ・・・る・・・か
オレの、部屋の前で母さんが冷たい視線でこちらを見ていた

「暗示・・・あんなって子は・・・」

「いや、母さんこれは誤解・・・誤解なんだ」

「母さんは、悲しいよ、いくら思春期だからと言ってこんなかわい
い子に・・・」

「だから誤解だつて！！！！！！！！」

何とか、オレは母さんに全部事情を説明した

「母さんは、半信半疑な感じだったが、オレの言ってる事を分かっ
てくれた」

「はあ〜朝から疲れた」

「まあ、そんなに気にするなよ！」

「うるせー！誰のせいでこんなことになったと思ってるー！！」

「うるん、暗示かな？」

「なわけねえよ！ていつか名前で呼ぶな！！」

「こうしてオレの疲れる一日が始まったのだ！！」

キャラ設定 and プローグ (前書き)

今頃ですけど、キャラ設定とプロローグを書いてみました

キャラ設定 and プロローグ

くろたあんじ
黒田暗示

人は、「仲間」があつて成り立っている

異常も過負荷もそうだ・・・

みんな、「仲間」がいるからこそ今の自分がある

しかし、ある少年にはその「仲間」がない・・・

そう・・・黒田暗示である

少年は今、何を思うか・・・

パラレルズノウ
異世界知

自分が他の世界に行ける能力である

人の情報や弱みになる情報を自在に知ることが出来る

しかし、この能力はあまり戦闘向きではないため実戦では、あまり期待できない

その他 スキル

・他にもスキルがあるらしいが本人はあまり使いたがらない

好きなもの

- ・ハンバーガー
- ・ポテト
- ・ステーキ
- ・焼肉
- ・その他もろもろ

嫌いなもの

- ・キャベツ
- ・ブロッコリー
- ・漬物
- ・にんじん

性格

意外と気さくな性格で、普段は不真面目だがここぞ、という時に力を発揮する

意外と清純な高校生

人がボケたら心の中では意外とツツコミをいれる

綺羅瀬真意きろせまこと

少女は、己が何者かが分からない・・・
ずっと、ずっと、悩む時

ある少年と出会う

彼女もまた何を思うか・・・

心読み（メンタルリード）

人の心が読める能力である
実戦で使えそうだがまだ試されていない

その他 スキル

・彼女もいくつかのスキルを所持している

好きなもの

- ・ケーキ
- ・パフェ
- ・いちご
- ・ぶどう
- ・その他もろもろ

嫌いなもの

- ・ゴーヤ
- ・納豆
- ・なす
- ・ピーマン
- ・その他もろもろ

性格

自由気ままな性格
人をからかうことを好む
少しSな所もある

襲撃と真相

はあ〜疲れた・・・

何でこんな事に・・・

やあ、皆さん今オレは、学校の登校中だ

え？なんでそんなにテンションが低いかって

それはね、こいつがいるからだよ

「こいつって言うなよ黒田君！私達友達でしょ〜！」

そう、綺羅瀬だ・・・

「いつの間にお前と友達になったんだ!？」

「えー私達、同じ穴のムジナでしょ〜？」

「・・・」

そんなこんなでしゃべりながら歩いていたら善吉が目の前に現れた

「どづしたの？善吉君」

「お前ら一体何を考えているんだ!？」

「へ、何の事？」

「とぼけるな!！」

そう言うと善吉がオレに蹴りを入れようとしてきた

その時、綺羅瀬がそれに感じてオレの服を引っ張り助けた

「危ねえ!！」

「大丈夫? 黒田君」

「ああ、サンキュー!！」

「おい善吉! 何しやがる!！」

「うるせえ!！」

蹴りをいれてきた

ちっ! しょうがねえな、あまり使いたくなかったけどあれを使うか
!!

「パーバレンティ天の邪鬼!!!!!!!」

それを言った瞬間、善吉が地面に倒れた

「何、そのスキル？」

綺羅瀬が言った

「ああ、このスキルの名は天の邪鬼パーバルシテイ、相手の言ってることややってることを逆にするんだ」

「つまりどう言う事？」

「例を上げて説明すると相手が右の道を行くと言ったら自分が左に行く、みたいな感じかな？」

「ふうん」

「つまりさっきの善吉君は、怒りと闘争心が強かったけど、天の邪パーバルシテイ鬼を使うことで善吉君の怒りや闘争心をなくしたんだね！！」

「そう！で、これ色々なスキルにも影響あるから嫌なんだよね」

「例えば、お前の心読み（メンタルリード）あるだろ？」

「うん」

「これがあれば、お前のそのスキルを逆にしてお前の心の中が丸見えになるわけよ」

「黒田君……」

「ん？」

「変態だね」

「うるせえ〜！」

だから使いたくなかった……

「とりあえず、こいつを起こしてオレ達を襲った理由を聞こうじゃないか」

「そうだね」

オレは、天の邪鬼バーバルンティを解いた

解いた瞬間に、オレは善吉君の胸^{むなびれ}緒を掴んだ

「おい！なんでオレ達を襲った！！」

「最初に襲ったのは、お前らの方だろ」

「はあ？何のことだ？」

「知ってるぜ、暗示は確かポースマイナス十三組だったことを！！」

「どこでそれを！！」

「昨日、生徒会の仕事をしてる時にポースマイナス十三組の1人が俺達を襲ったんだよ！！！！」

「そいつが暗示のことを言っていたんだ！！」

「！？」

「おかげで俺達は、ぼろぼろにやられ、めだかちゃんはどうかに行っちゃまうし生徒会は始められなくなっちゃまった」

「そういうことか」

オレは、両手を善吉の肩に置きこつ言った

「なあ善吉、オレは確かにポースマイナス十三組だが決してお前らを傷つけるつもりはない!!」

善吉は、驚いたような顔でオレを見た
そして、オレはこつ言った

「オレが、その犯人を捕まえてやる!!」

忍びよる影

第三者 side

理事長室で安心院と不知火理事長が話していた

「いや、参ったぜ不知火君！」

「まさかマイナス十三組があるにも関わらずポースマイナス十三組なんて中途半端な物を作るんだからね！」

「……はい」

「どづした？君らしくないぞ」

「実は、ポースマイナス十三組に予想外のアクシデントがありました……」

「なんだい？」

「せんとうれいふ仙道麗不が生徒会を襲撃しまして、多大な被害を受けました」

「ああ、麗不君かあ、確かに彼はちょっと厄介だねえ」

「まあ、その所は大丈夫さ！」

「ポースマイナス十三組には、彼がいるからね」

一方、その彼は・・・

「ちくしょー！！忘れ物したーーーー！！」

走って家に忘れ物を取りに戻っている所だった

暗示 side

くそ！

どこのどいつだー！！

オレの大切な大切な友達を傷付けたのは！（本当のところ分かんが）

「どっかのマンガの台詞みたいだね」

「うるせえー！ていうか何でお前もついて来るんだよー！！」

「ん？暗示君のことがだいたいグーイスキだから!!」

綺羅瀬が、笑いながら言った

「はあ？」

「だから私は、黒田君を守る!!」

意味が分からん!

そんなことを話している内にオレは家に着いて忘れ物を取り、学校にダッシュ!!

はあゝ走るスピードが上がるスキルが欲しいな

「そんなこと思ってる暇があったら、今この状況をどう打破するか考えて!!」

「分かってるよ!!」

〈15分後〉

ふうゝ何とか着いたな

あつ！そうだ！！

怜次に、クラスが変わること言っていなかった！！

「じゃあ、言ってきたら」

「分かってる」

「ていうか、いちいち人の心を読むなよ！！」

「あつ、ごめん」

オレは、急いでマイナス十三組に行き怜次にクラス変えのことを話した

「え！？まじかよ！！」

「ああ、まじだ」

「そうか・・・でもクラスが変わっても俺達の友情は変わらないぜ
！！」

「それは、なんのマンガの台詞だよ！！」

「ばーか、これは俺の台詞だよ」

「そうか・・・」

「じゃあな、そろそろ時間だから」

「おお！またな！！！」

そう言つて怜次と別れて廊下を歩いていた
良かった〜あまり怒つてなくて
ぶっちゃけ心配だった訳よ

「何が？」

「怜次が、我を忘れて暴れまくるんじゃないか・・・って」

そこには、綺羅瀬がいた

「ふうん、そんな事考えてたんだ〜」

「なっ・・・！」

「いつからいたんだ!!」

「ん？暗示君が、廊下に出てきた時から」

「影が薄いな!!お前は、日之影先輩か!!」

「ん？誰その人？」

あつ、そうか、こいつ日之影先輩のこと知らないか・・・

「何でもない」

「えー気になるじゃん!!」

「何でもないったら」

みたいなことを話しているうちに教室に着いた
ドアを開けてみると・・・誰もいなかった

これは、一体どういうことだ？

登校義務がないのはアブノーマルだけなのに・・・

「確かに、変だね」

「私も、このことは聞いてないわ」

「そりゃあ〜そうですね」

「「!!」」

後ろから、得体の知れない声が聞こえた

まるで、体にベタベタ触ってくるみたいに

後ろを振り返ってみるとそこには、仮面を被ったような笑顔の少年
がいた

なっ!

こいつ、いつの間にオレの後ろに!!

ていうか、後ろに登場するの流行ってるのか!?

「お前は誰だ!」

「ミーですか?ミーの名前は、せんとつれいふ仙道麗不です」

「なぜここにいるんだ?」

「なぜって・・・それは、ミーがポースマイナス十三組だからです」

「そうなのか!?!」

「はい」

こいつ・・・仮面のような笑顔のままで、全然表情をださない

「じゃあ麗不、もう一度聞くんが、何で他のポースマイナス十三組がないんだ?」

「・・・」

気持ち悪い笑顔のまま何も話さない
オレは、イラついて

「答えるよ!?!」

と言った

その瞬間、麗不の口がどんどんつりあがって耳の位置まで行きそう
なくらい上がった
そして、こう言った

「みなさん、他の組を潰しに行きました」

偽者の友情

「なっ……何考えてるんだ!」

「何考えるも何もミー達は、全て平等にしようとしているだけです」

「こいつ……何言ってるのか全然分からん」

「あれえ〜おかしいな」

「あなたもポースマイナス十三組なら分かるはずですが」

「生憎あいにくオレは、天の邪鬼だからそういうのは、理解していない」

「そうですか」

「なら、そちらのお嬢さんはどうです?」

「バーカそんなこと綺羅瀬が知るわけないぜ」

「なっ！」

「・・・」

嘘だろ・・・

いや、そんなはずない！

そして、もう一度聞いた

「綺羅瀬はそんなこと知らないよな！」

「・・・知ってる」

なっ・・・！！

「隠しててごめん、黒田君」

「何で教えてくれなかったんだよ！！」

「もしも、黒田君がこのことを知ったら転校しちゃったかと思うから・・・」

「まあ、そんなに彼女を責めないであげてください」

「うるさい!!ところで何なんだよその平等てやつは!..」

「まあ、落ち着いてください」

「ミー達は、ある計画をしているのです」

「何だよ」

「それは・・・裏フラスコ計画です!!」

「裏フラスコ計画だと!？」

「そう!!フラスコ計画は「天才」を作り、裏フラスコ計画は、「落ちこぼれ」を作るんです」

「それが、クラスを潰すのに何の関係あるんだよ」

「関係大あります」

「ミーの仲間は、他のクラスに攻め入り仲間を増やしていくのです」

「どっやって仲間を増やすんだよ」

「はあ、本当に知らないんですね」

「ミー達ポースマイナス十三組は、一度でも敵と戦うと戦った相手は、無意識の内に仲間になるのです」

「暗示君は、マイナス十三組の人と戦いましたよね？」

「なっ！何でオレの名前を？」

「暗示君は、こここのクラスでは有名人ですから」

「た・・・確かにオレは、怜次と戦ったと思う」

「ミー達は、戦った相手を仲間にする体質なんです」

「そして、戦った相手は自分と同じレベルに下がるのです」

何だよそれ!!

ほとんど球磨川先輩の却本作り（ブックメーカー）じゃねえか!!
ていうか、怜次と仲良くなったのはこの体質のおかげ？

「うん、そうだよ」

綺羅瀬が言った

「お話がお分かりになったようで」

「それで何で、麗不がここにいるんだ？」

「はい！あの有名な暗示君にごあいさつに来たんですが・・・」

「どづしたんだよ」

「ミー達の友達作りにどうも納得がいかないようですので、排除させてもらいます」

「黒田君危ない!!」

綺羅瀬がそう言う

オレは、身の覚えのない教室にいた
誰もいない……

「どこだここ？」

「ここは、中学校の教室だよ」

そこにいたのは、黒い髪の……安心院さん……!

「やあ、黒田君！」

「元気してた？」

「それよりも、ここは中学校ってどういふことですか？」

「じゃあ聞くが何でここにいると思っ？」

「……夢とか？」

「まあ、当たってるっちゃ当たってるね」

「じゃあ、回答をするよ」

「はい」

「君は、死んだんだよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7269z/>

負の惨劇

2011年12月29日17時46分発行